佐賀市教育研究所ニュースレター

木漏れ陽

2月

令和7年2月17日　第83号
発行　佐賀市教育研究所
発行責任者 所長 青柳正文

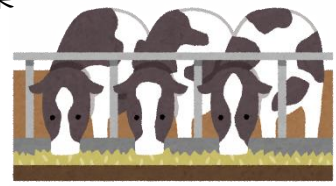
子どもたちとの関わりをとおして

特別支援教育が学校教育法に位置付けられ、スタートしたのが平成 19 年 4 月からです。今年で 17 年目を迎え、社会の理解の変化やインクルーシブ教育の推進、教育支援体制の強化、多様な支援方法の広がりなど、次々と変化し続けているように感じています。

先月、卒業生の“二十歳の集い”に出席する前に、本棚にある卒業アルバムを何冊か引っ張り出して、これまでのことを想起していました。ありがたいことに、特別支援教育が始まる前から、さまざまな子どもたちや保護者の皆様との出会いをいただいてきました。その中から、私の関わった知的障害のある中学生の卒業後についてお伝えしようと思います。

彼女は小学低学年程度の学力で、興味のないことや体を動かすことに取り組むことが苦手で、周囲の人や環境に対してとても受動的な生徒でした。人見知りですが、えくぼの笑顔がとても印象的でした。動物が大好きで、自宅で小動物を飼育していて、小学校の、「個別の教育支援計画」の“本人の願い”の欄には、「獣医になりたい」と記されていました。私を含め、彼女の願いを実現させることは難しいと考える人は多かったと思います。

彼女は中学校を卒業し、特別支援学校高等部へ進学しました。現場実習先を決める時に、高等部の先生が、じっくりと話し合いを重ねてくださり、山の中にある動物を飼育する作業所に行くことを自分で決めることができました。実習中、彼女は早朝から働き、天候に左右される大変な環境で一生懸命に取り組みました。わからないことがあると自分から進んで尋ね、担当する仕事が終わるとすぐに報告する姿が見られました。学校生活とはまるで別人のように積極的に行動する姿に、周囲は大変驚きました。動物たちと触れ合うことで得られる喜びや充実感が、そのような姿として現れたのだと思います。



実習が終わり、「今ならば（作業所を利用できる）枠がある」という誘いがあり、高等部をやめて動物にかかわる道を本格的に進むことを彼女は決意しました。家族は今後に不安を感じていましたが、本人と家族で、本人と先生とで、丁寧に状況を整理して話し合い、もう一度実習を重ね、その決断に至ったそうです。中学生の時には、周囲が実現することはないと感じていた“彼女の願い”は、形を変えながらも、本質的な部分はそのままに実現していったのです。

彼女の成長の過程を通して、私は子どもへの関わりについて示唆を得ました。日々の生活の中で、子どもが自分の意思をもてるように関わること、そうして育んだ意思を尊重しながら、思考や選択、意思決定に伴走していくこと。何より自身の人生の主体として生きていけるような関わりをもつことは、子どもたちが自分らしく輝ける居場所を見つけていく手助けになるはずです。

あれから 10 年ほど経ちました。彼女は、この冬も、寒さの厳しい中、小動物や牛のお世話をしています。

（特別支援教育係 野中裕恵）

■個人研究の実践を教育実践研究論文に応募

自分の研究主題に基づいて１年間研究を積み重ねた成果は、次年度５月に弘済会の教育実践研究論文に応募します。今年度応募した個人研究（昨年度の取り組み）の審査結果は下記のとおりです。佐賀市の先生方の教師力向上に資す内容で、参考になる取り組みがたくさんあると思いますのでぜひ参考にしてください。

学校名	氏　名	研　　究　　主　　題　　等	審査結果
諸富北小（田代小）	小宮理子	話すことの面白さを実感し、児童が主体的に学ぶ国語科を通した授業づくり ～話を楽しくつなぐ活動を通して～	佐教弘教育賞
兵庫小	酒井一樹	音楽を愉しむ児童が育つ音楽教育 ～知識・技能を基盤とした音楽への関わり方のアプローチ～	入選
高木瀬小	徳永雄一	誰もが笑顔で過ごせる学級作りを目指して ～解決志向アプローチを取り入れた学級経営を通して～	入選
川上小（県学校教育課）	落合由美子	児童の自己肯定感を育む学級づくり・学校づくりの実践 ～「ほめるからはじめる、はじまる」日常における言葉かけと、自他尊重を重視した活動を通して～	入選

■令和7年度の個人研究は、4 月に募集する予定です。教師力向上のチャンスです。

日ごろの実践をまとめてみられませんか。

差別のない学校風土づくりを

今年度の各学校への人権・同和教育の校内研修は、ハンセン病家族訴訟原告団長で九州の同和教育の創始者である林力（はやしちから）さんの「私と部落とハンセン病」に学びました。差別が厳しかった時代、ハンセン病患者である父を隠し通して生きていた林さんが教員となり被差別部落の子どもたちと接する中で「水平社宣言」出会い、「恥でないことを恥とするときそれは本当の恥となる」との思いに至り、「解放を問われつづけて」を出版し、揺るぎない信念で反差別を貫き通した100歳の人間の生きざまに深い感動を覚えました。また、夏期講座の川口泰司さんの話の中にあった「日本の人権基準の高まり」による我々教員の人権意識のアップデートの必要性を指摘されたことも新たな学びでした。

学校現場で差別を意識することはそう多くはないのですが、いじめや不登校の対応に接するとき子どもたちの差別心を意識することがあります。全国学力・学習状況調査での佐賀県の状況が芳しくなかったことの原因の一つに学級・学校の差別体質もあるのではないかと話しました。安心して何でも言える学級、すべての子どもたちに平等に接してくれる先生、そういう先生をほめたたえてくれる学校。そういう学校では学力の底上げが図られ、公教育の使命が達成されるのではないか。佐賀市の小中学校でも引き続き支持的風土あふれる学校づくりを推し進めていただきたいと思っています。

（学校人権・同和教育指導員　下田秀人）

令和６年度佐賀市教育研究所員会実践発表

指導案等は 71 全校共有共用フォルダ→小・中学校共通フォルダ→03 研究所員会　➡　令和６年度佐賀市教育研究所員会　をご覧ください。

《　６年度の取り組みとお礼　》

今年度は、全国学力・学習状況調査分析結果の不十分なところを改善する授業提案を研究の目的としました。

研究所員会の実践発表は、２月１３日の佐賀市教育情報化推進リーダー研修会（オンライン方式）で、全小中学校の先生方に可視化し、ご意見を頂く形で行いました。

各部の先生方は、授業実践を通して研究を重ね、皆様に伝わるように発表を工夫されました。情報推進化リーダーの先生方も事前に発表の PowerPoint を見られ的確な質問やご意見をよせてくださり感謝申し上げます。

今年度は、所員の先生が公開授業ウィークを設け、更に、所員の協力者の８名の先生が授業を公開するなど大変画期的な取り組みに敬意を表します。会場校の先生方にも大変お世話になりました。

【国語部会】

（１）　分析結果の課題

小「資料を活用し、自分の考えが伝わるように表現を工夫する」

中「話す・聞く　他者の発言と結びつけて自分の考えをまとめる」

（２）　授業のねらい

物語の描写を元に表現の効果を考え読みを深めること

（３）　ICT 機器の活用

- Word（原稿用紙設定）を使い、teams で紹介文を共有
- 面白さ解説文を書くための情報を教師がまとめて PDF にしてチームスで共有
- 物語の終わり方についてポジショニング（スカイメニュー）を活用
- リーフレットを PowerPoint の「パンフレット機能」で作成
- ふりかえりアンケートを Forms で行い授業改善

（４）　研究の成果

- 自分で問いを立てたり、問いを磨いたりすることで主体的に授業に参加。
- 表現の工夫や効果について根拠を示しながら考えることができた。
- ICT 機器の活用で意見や成果物の共有がしやすい。

質疑　ポジショニングは振り返りや次の時間にどう生かされたのか。

回答　考えの変容　学習前後の比較、変化を見取って考え方に気づくことができた。

【算数・数学部会】

（１）　分析結果の課題　「思考・判断・表現」の観点

特に記述式問題での正答率が低い。中では図形。

算数　・複数のことを結び付けて考えること

・問題の条件に沿った答え方をすること

数学　・活用力を問う記述式問題で必要な情報を読み取ること

・正しい手順を踏んで言葉で説明すること

（２） 研究テーマ
「図・式・言葉を関連づけて考えを表現し伝え合う
児童・生徒の育成」
～協働的な学びを通して～

（３） ICT 機器の活用
・作図方法を動画にとって友達に説明する。（自分の班→別の班）
・動画に沿って説明文を考え、説明の練習をする。
・動画を見返して確認、全体で共有

（４） 研究の成果
・伝え合う必然性で他者との活発な関わりが生まれた。
・協働的な学びで相手の理解が深まった。
・ICT 機器は伝え合うために有効で何度でも見返すことができる。

質疑　スカイメニューの動画を活用する以外での活用場面は？
回答　「発表ノート」機能を使って提出をさせ評価に活用

【協働的な学び部会】

（１） 分析結果の課題
・小中学校いずれも意識は高いのに授業内容の理解度が低い。
「話し合う活動を通して考えを深めたり新たな考え方に気づいたりすることができている。」
「友だちや周りの人の考えを大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる。」
➡ 国語・算数（数学）授業内容分からない。

（２） 授業改善
協働的な学びの意図・必要性を理解
➡ 確かな学力の醸成

（３） 協働的な学びの目的
① 問題発見・課題解決力
② 折り合いをつけて人と関わる力
③ 全員が目標達成を諦めないチーム力
④ コミュニケーション能力
⑤ 自分の言葉で自分の考えを説明する力

（４） ICT 機器の活用
・説明を伝えるタブレット　他者にアウトプットする道具（紙とペンでも可）

（５） 研究の成果
・「協働的な学び」の目的の明確化
・公開ウィークを通した「協働的な学び」の深化
・学力の二極化の改善

質疑　授業のまとめ方は？
回答　タブレットや発表ノートは学習手段であり、めあては「〇〇を説明できる」なので、小テストでお互いに説明することでまとめとする。

《来年度構想》
研修後のアンケートは、来年度も「是非、研究を広めたい」という前向きなご意見が多く見られました。来年度の研究所員会も、全国学力・学習状況調査の分析を踏まえた授業改善を研究する予定です。子どもたちの実態に応じた授業づくり、ICT 機器活用等に関心のある先生方は、是非希望していただけると幸いです。
※２月１３日の発表会の様子は、右記の QR コードからご覧いただけます。

（教育研究所指導員　権藤順子）